

ゾウを狙った砲撃（ゾウへの大砲の発射）

【Shooting with Cannons at Elephants】

http://www.upali.ch/murten_en.html

2002年1月23日発行の「Neue Zürcher Zeitung」の記事の翻訳

ムルテンの悲しい事件（結局、最後には博物館の展示物になった）

1866年6月27日の朝、サーカス（アメリカン・トラベリング・サーカス・ベル・アンド・メイヤーズ）の一部として、ムルテン（スイスのフリブール州）の小さな商店街をオスゾウたちが行進していた。ゾウの調教師のモファット（イギリス人）は、Weisses Kreuzホテルのゾウ小屋の前で、マストになったオスゾウによって、苦痛を伴うひどい死にかたをした。しかし、彼は、自分が死ぬ日の明け方（午前3時）以前に、自分が自分のオスゾウによって、空中に放り投げられ、蹴られ、こづき回されながら死ぬとは、決して夢にも思っていなかっただろう（自分のオスゾウに、こんなひどい目に逢わされて死んでしまうとは、本人は、その日まで想像もしていなかっただろう）。モファットの気持ちとはかけ離れたことに、モファットの死の状況と結末が、いつの日かベルン市民コミュニティ自然史博物館の特別な展示対象になるかもしれないという考えが常にあった。

楽しみ（歓喜）は、恐怖（戦慄）に変わった。

1866年6月のある水曜日の朝、ベル・アンド・メイヤーズ一座は、ムルテン（人口2200人の小さな町）に到着した。毎週のフェアは進行し、人々は、田舎の退屈な生活にちょっとした興奮をもたらした派手な集団を一目見るために、通りの両端に群がった。そして、調教師モファット（イギリス人）は、彼の2頭のインドゾウと一緒に、観衆たちのど真ん中に居た。昼食時の初めに、彼のゾウたちは、噴水の水を自分の体と好奇心の強い見物人にはねかけて濡らした（特に、その夜の公演後の間に）。ムルテンの人々は、以前に、ゾウを見たことは決してなかった。そして、遠い東南アジアから来たその強大なエキゾチックな動物たちは、いろいろな芸を見せたので、彼らは畏敬と驚きで満足した。

まさしく数時間後に、熱狂は恐怖（戦慄）に変わった。午前3時前に、錠前屋のヨハン・フレイは、通りの異常な騒音によりショックを受けて目が覚めた。後に、彼は、その夏の夜の忘れがたい事件について記録した。「ゾウの狩りは、野蛮で大胆だった。もし、事件が建物の間で起こらなければ、私はインドに居ると思いきりこんでいたかもしれない。そして、大騒ぎによって、人々が眠りから目覚めて、私は、実は今まで通り、ムルテンに居る

と気づいた。」ニュースは、野火のように広がった。ゾウのうちの 1 頭は、自分の飼育係（モファット）が死んでしまうまで踏みつけた。荒れ狂ったオスゾウが、一頭引きの馬車を破壊し、窓ガラスを粉々にし、いくつかの樽を転がした後、人々は、ゾウ小屋の中にオスゾウを追いたてることに成功した。

明らかに、ゾウはマストになっていた。マストは、オスゾウが約 15 歳の時から始まる状態のことで、長い間、オスゾウは攻撃的で制御不能になる。野性では、優位なライバルたちは、マスト期を迎えたオスゾウを避ける。そして、マストになったオスゾウは、しばらくの間、ゾウの群に合流し、メスゾウと交尾する。サーカスのゾウたちが、まだ、チェーン繋留され続け、非常に狭苦しい状況で、みすぼらしい生活をしていたこの時代には、行動に関する科学は、まだ依然として初期段階であった。もちろん、誰もこの状況（マスト）を十分に知らなかった。ムルテン当局は、凶暴な戦士ではなくなった（マスト期が過ぎた）オスゾウを、どのように手なずけて（飼い慣らし）、町の人々に降りかかる更なる被害をどのように防止するか、という深刻な問題を抱えていた。

緊急召集された会議において、サーカス経営陣との相談の後、町議会は、制御できないゾウは、射殺するしかないと決定した。

Rathausweg から Chabaud までの路地の家々は封鎖され、児童たちは、校舎に隔離された。そして、すぐ近くの州の首府から、一台の大砲を有する軍隊が徴兵された。見た目には、弾丸が貫通しそうにないゾウの皮膚にライフル銃の弾丸が、はじき返されないかどうか、そして、はじき返された際には、巨大な動物を更にイライラさせるかもしれないかについて、結局、誰も自信がなかった。

砲兵と狙撃手の分遣隊もまた招集された。彼らが配置についた時、すでにいくらか疲弊させられていたオスゾウは、水、乾草、パンを使ってゾウ小屋から誘い出された。部隊指揮官は、発砲を命令した。「大砲の閃光が走り、同時に、雷が落ちたような砲撃音がした。そして、銃の一斉射撃が始まった」と、記録者のフレイは記録している。「ダニエル・ストック大尉は完璧な射撃を行い、それはゾウを貫通した。ゾウは、ゆっくり片側に傾いて、ピクリとも動かず固まったままで大砲の砲弾によってできた穴の上に倒れこんだ。そして、ゾウの左半身から温かい血の洪水がこんこんと噴き出した。・・・しかもそのうえに、上述した狙撃手の一隊は、地面で横たわって死んでいるゾウに向けて、数回の一斉射撃をした。」

死んだ神話的な動物のための展示館

何度も斉射されて、ムルテンのゾウは、それまでにジュネーブ、ベニス、ロンドンで、

他のゾウたちが同じことをされたように全くの肉片になった。



しかし、ムルテンの人々は、この死んだゾウに関する特別計画を実行した。肉屋は、上手に死体の皮をはいで、肉を切って、その肉を1ポンドあたり0,2スイスフランで売り、それをシチューにした。そしてその後、残った遺骸（骨や皮）は、保存され展示されることになっていた。しかし、悲しいことに、適した会場が見つからなかったことが解った。こういった理由で、いわば、死んだ神話的な動物のための聖堂としてのエキゾチックな展示館が、建設されることにな

っていた。しかし、この企画が、相当な金額をむさぼることが明らかになった時に、人々の熱意は、すぐに弱まった。オスゾウの死体だけの獲得に、町は、850スイスフランを支払った。製革業者に600スイスフラン、剥製師に1550スイスフランを支払った。その一方で、このゾウの遺体（の残りの部分）は、未だに一時的な掘っ立て小屋に置かれていた。1867年11月に、ゾウの展示館を最後まで支持者していた人々も、とうとう、敗北を認めた。そして、市民議会は、骨格と保存標本をベルン自然史博物館に3000スイスフランで売却することを決議した。骨格は、結局、最後には、ベルン大学の解剖研究所に置かれた。博物館が1930年代に移転した際に、皮膚標本はなくなった。まず、たぶん、皮膚標本は捨てられたのだろう。